特　集

高校進路指導現場の困惑

リクルート「高校の進路指導に関する調査」

高校の進路指導が難しさを増している。今回の調査結果からは，高校の進路指導担当者の悩みが窺える。特に難しいと回答しているのは，大学進学者も，専門学校進学者もいるいわゆる「進学先多様校」の先生だ。7月にＡＯ入試が始まってから，3月に一般入試が終了するまで，さまざまな入試形態に対応し，早期に合格した生徒への対応もしなければならない。大学や専門学校はこうした高校現場の実態を把握し，先生の声に耳を傾けながら募集や入試戦略の方向性を決める必要がある。今回は，高校進路指導主事へのアンケート結果を報告するとともに，進路指導・キャリア教育に熱心に取り組んでいる高校の事例をレポートする。

調査報告　全国の進路指導担当者がとらえる

高校現場の課題とキャリア教育の進展

角田 浩子　株式会社リクルート 進学カンパニー進路サポート部『キャリアガイダンス』編集長

本調査は，全国の高校で行われている進路指導の実態を把握するために，高校進路指導の専門誌『キャリアガイダンス』が隔年で実施しているもの。2004年より行政主導で導入が呼びかけられたキャリア教育についても，その推進状況を確かめた。

1　高校の進路指導現場の実態

進路指導の難しさ

9割超が難しさを感じている

進路指導の担当者は現在の進路指導の難しさについてどう思っているだろうか。

進路指導主事が中心である回答者の34％が「非常に難しい」と回答（図表1）。「やや難しい」の58％と合わせると91％となり，大多数が進路指導を困難に感じていることがわかった。前回の06年の調査結果と比べると，「非常に難しい」が6ポイント以上増加しており，より難しさを感じる状況になっていることがうかがえる。

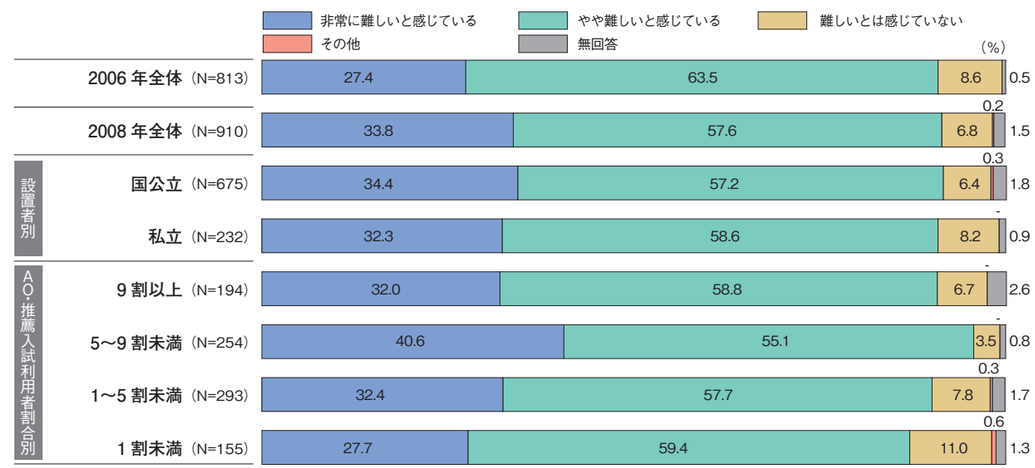
学校の属性別に見て「非常に難しい」が多いのは，私立より国公立，大短進学率別では〔40～70％未満〕の中程度校，そしてＡＯ・推薦入試利用者が〔5～9割未満〕の高校となった。生徒の進路が多様な学校でより困難度が高くなっている。

進路指導の難しさの要因

選べない・決められない生徒たち

その要因は何か。現在の進路指導を「非常に・やや難しい」と回答した人にその要因をすべてあげてもらったところ，6割を超えたのは，生徒の「進路選択決定能力の不足」

図表1　進路指導の難易度



65％と「学習意欲の低下」60％,「教員の進路指導に関する時間不足」62％,「入試の多様化」61％だった(図表2)。

自分の進路を選べない・決められない，勉強にやる気のない生徒への指導と，入試の多様化などによって増加する仕事量で「時間不足」に陥っている指導現場の状況が見えてくる。時間不足は進路指導の難しさの結果であり要因でもあるのだろう。

また，前回と比べて増えたのは「家庭・家族環境の悪化」,「産業・労働・雇用環境の変化」。逆に減少が目立つのは，生徒の「学力低下」だった。

現在高校で進路指導にあたる教師たちは，ひところ騒がれた「学力低下」という問題以上に生徒の「学習意欲の低下」に悩み，膨大な入試情報収集・事務処理に追われながら，家庭や雇用環境の悪化という社会情勢の急変に翻弄されているといっていいのではないだろうか。

難しさの最大要因は

生徒の「学習意欲の低下」がトップ

次に，図表2の進路指導を困難にしているすべての要因のうち，なかでも大きな要因と感じているものを3つまで選んでもらったのが8ページの図表3である。

その結果を多い順に見ると，「生徒の学習意欲の低下」が29％で1位。「入試の多様化」27％,「生徒の進路選択・決定能力の不足」24％,「家庭・家族環境の悪化」21％,「教員の進路指導に関する時間不足」21％と続いた。「学習意欲の低下」は高校の大短進学率別に見てもどこも上位にあがっている。いまやすべての高校の先生方が生徒の勉強へのやる気のなさに困っているのだ。

［大短進学率70％以上］の高校では「入試の多様化」が困難の要因1位に,「教員の進路指導に関する時間不足」が3位となった。［大短進学率40～70％未満］の高校では3位に「家庭・家族環境の悪化」があがってくる。［大短進学率40％未満］の高校では「家庭・家族環境の悪化」が1位となり，2位から5位まで「生徒の進路選択・決定能力の不足」「職業観・勤労観の未発達」など生徒の問題が上位を占めた点が特徴的だ(図表3)。

また，それぞれその要因によってどのような困難が生じているかを具体的に記述していただいた。以下高校の進学率別に傾向を見ていく。

生徒の学習意欲の低下

［大短進学率70％以上］の高校では,「言われたことは言われた分だけ実行しようとする」が「自分の力で自ら学ぼうとする気持ちに欠けている。教えてもらう受け身の気持ちが強すぎる」など受動的な姿勢や，家庭学習の少なさを指摘する声が多かった。

［大短進学率40～70％未満］の高校では，［大短進学率70％以上］の高校と同様に自主的な学習ができないことのほか,「『知ること』『わかること』に喜びを感じない」といった知的好奇心の乏しさを指摘する声が目立った。「向学心を持って『おもしろい』と感じるのではなく，ただ単にテレビを見ていて『おもしろい』と感じるような授業にしか興味を示そうとしない」という現実がある。

また,「努力する前に学校を決めてしまう」ことも。日常でも「課題を必ず提出しなければならないと思わない。課題提出率も低下した」という。

［大短進学率40％未満］の高校になると,「授業中の居眠り」や「安易な欠席や遅刻」が目立ち,「あきらめ感が浸透している生徒が多い」など，通常の学校生活が成立していない状況が見えてくる。

入試の多様化

［大短進学率70％以上］の高校では困難の理由1位。高校現場で「すべて把握するのは困難」なほどだといい,「求められる学力から進路の決定時期まで様々な点で異なる生徒に対し，教員側に必要な知識量も，仕事量も過大なものになってしまう」「ＡＯ入試などの指導は面接指導などが多く，また，専門的な知識も必要になってくるので，そのための研究などもやらなければならない。時間がない」と，教師の多忙化を嘆く声があがっている。

［大短進学率40～70％未満］の高校の記述にも,「個別の指導が多くなり多忙と対応不足が生じる」「個々のケースについて多様な入試を組み合わせ，入試計画を立てさせることが非常に手間」など，生徒個別に受験指導する苦労がうかがえた。

「あまりにも早い時期に合格すると，その後の高校生活の目標が薄れる傾向にある」との声もあがっている。

生徒の進路選択・決定能力の不足

［大短進学率70％以上］の高校では,「生徒自身が将来学びたいことや，なりたい職業がなく，なんとなく大学進学しなければならないという理由で志望するので，モチベーションを維持するのが大変」で，実際に「能動的に進路を決められず，安易に指定校に走る」「安易にＡＯ，推薦に走りやすい」状況がある。

「生徒本人が決定できない。教員の意見に頼りがち」な原因として,「すべて手取り足取り教えられてきた世代なので」「生活経験が不足していて」など，現在の高校生たちの過保護な生育環境や体験不足を指摘する声が多くあがった。

［大短進学率40～70％未満］の高校では,「やりたいことが見つからないから決められない」「わからないとすぐ逃げる」など消極的な態度の一方,「片寄った情報だけ」「ＨＰの情報のみ」で進路を決めてしまう「視野の狭さ」をあげる記述が目立った。そのためか,「自己との適性を認識できずに学部・学科を選び中途退学につながるケースが出てきた」という。

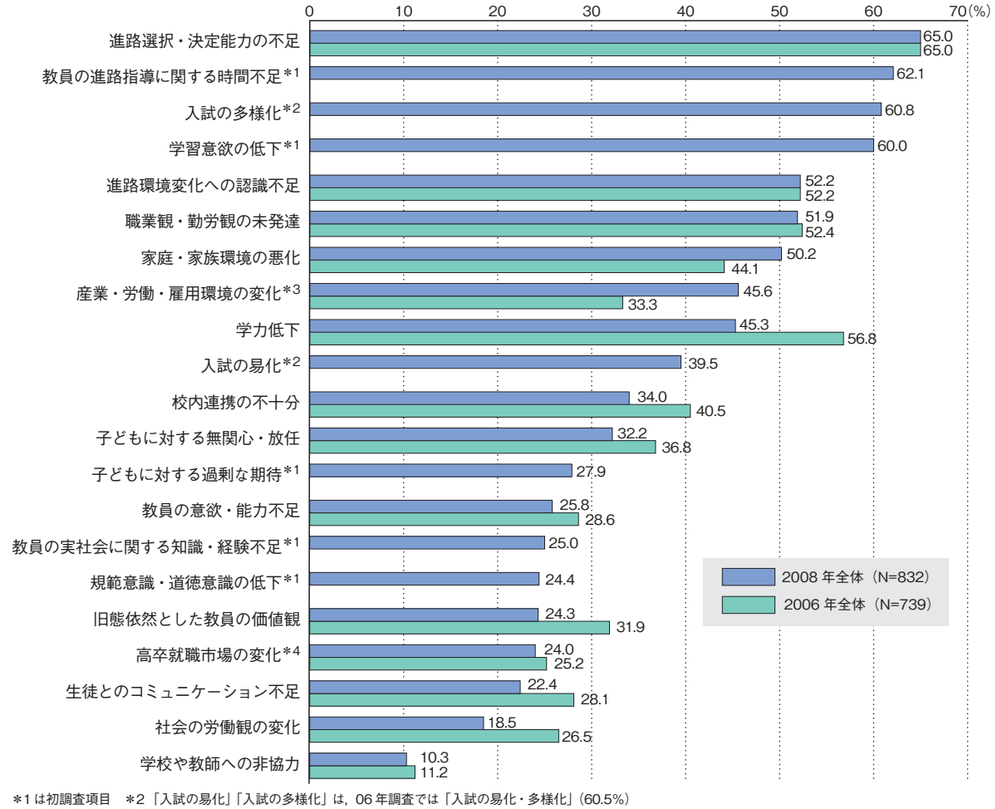
［大短進学率40％未満］の高校ではさらに深刻で,「自分の進路選択にいい加減」「なんとかなるという安易な考え」で,「自分で調べようとしない」「指示されないと動けない」，他人事で自ら行動しない生徒たちに困り果てている様子だ。

家庭・家族環境の悪化

［大短進学率40～70％未満］の高校では，家庭の経済的事情が生徒の進路を狭めているケースが多くなっており，学校からの情報提供などでは「どうしようもないほど困難」との声があがっている。

［大短進学率40％未満］の高校においては最大の課題で,「保護者が生活を続けていくだけで精一杯」「子どもの収入をあてにしている」といった状況のなか,「子どもが精神的に落ち着いて生活できず，ちょっとしたことで心

図表２　進路指導の難しさの要因（複数回答）



*1 は初調査項目　*2「入試の易化」「入試の多様化」は，06 年調査では「入試の易化・多様化」(60.5%)
*3　06 年調査までは「産業・労働・雇用環境」　*4　06 年調査では「高卒就職市場の状況」

を乱す」など，家庭環境の影響によって，生徒の気持ちを進路に向かわせること自体が難しくなっているのをうかがわせる。この調査は昨年10月時点に実施したものだが，その後の経済状況の急展開で，この問題はいっそう深刻になっていると思われる。

教員の進路指導に関する時間不足

［大短進学率70％以上］の高校では，多様化する入試への対応で膨大になった仕事量に追われていることに対する悲鳴が聞かれる。「ＡＯ・推薦・一般・センター。一年中忙しい」「進路資料を読む時間も模試分析をする時間もない」「一部の教員に仕事が集まる」なか，「過労で倒れそう」との声は悲痛だ。「パソコンに向かう時間は増加したが生徒に向き合う時間は減少した」などの訴えは笑い話ではすまされない。

［大短進学率40～70％未満］の高校でも，「会議・報告書作成・校務分担の増加」などによって，以前とは比較にならないほど教師の仕事量が増加しているという記述が並んだ。ここでも悩みは「生徒に直接指導する時間が確保できない」ことだ。

一方［大短進学率40％未満］の高校においては「生徒指導に時間を取られる」ことが「進路指導の時間不足」につながっている。以前の就職指導に比べ，「インターンシップや応募前職場見学等」の業務が増加していることも原因となっているという。

入試の易化

全体では6位，［大短進学率70％以上］の高校では5位，［大短進学率40～70％未満］の高校では4位にあがっている。

［大短進学率70％以上］の高校からは，「昔なら合格しない生徒が受かる⇨そういう先輩を見て後輩も勉強しない⇨それでいいと教師も思う」と，入試の易化によって「勉強しなくなるスパイラル」が出現しているという。

［大短進学率40～70％未満］の高校でも同様で，「本当に何も（勉強）しないで入学する」生徒が出てきたほか，「何をしに進学するのか考えない」という進学動機の欠如や，「勉強して入試に挑戦しようとする生徒の意欲をそぐ」という負の波及，「合格後の（さらなる）学習意欲の低下」と，影響の大きさがうかがえる指摘が集まった。

「高校での学習は大学入試のためだけではない」はずだが，「そんなことは奇麗事」と高校の先生から反発されることも多い。高校生の学習の動機づけのため，大学入試が高いハードルとなり，挑戦すべき目標として確固として存在してほしいという願いが，学校現場に非常に強くなっている。

図表３　最も大きな要因は何か

（図表１「非常に」あるいは「やや難しいと感じている」の回答者のみ・３つまでの複数回答）

順位	全体（％） N=832		大短進学率 70％以上 N=305		40～70％未満 N=195		40％未満 N=329	
1	＜生徒＞学習意欲の低下	28.6	＜進路環境＞入試の多様化	39.7	＜生徒＞学習意欲の低下	34.4	＜保護者＞家庭・家族環境の悪化	29.8
2	＜進路環境＞入試の多様化	26.7	＜生徒＞学習意欲の低下	29.8	＜進路環境＞入試の多様化	31.3	＜生徒＞進路選択・決定能力の不足	25.8
3	＜生徒＞進路選択・決定能力の不足	24.4	＜学校＞教員の進路指導に関する時間不足	24.9	＜保護者＞家庭・家族環境の悪化	24.6	＜生徒＞学習意欲の低下	24.3
4	＜保護者＞家庭・家族環境の悪化	20.9	＜生徒＞進路選択・決定能力の不足	23.9	＜進路環境＞入試の易化	23.1	＜生徒＞職業観・勤労観の未発達	19.1
5	＜学校＞教員の進路指導に関する時間不足	20.7	＜進路環境＞入試の易化	17.7	＜生徒＞進路選択・決定能力の不足	22.6	＜生徒＞学力低下	19.1

それぞれの要因がもたらす指導現場の実態 ―フリーコメントより抜粋（上位３要因）

■生徒の学習意欲の低下

【大短進学率70％以上】

●自分の力で自ら学ぼうとする気持ちに欠けている。教えてもらう「受け身」の気持ちが強すぎる（関西／その他）

●言われたことは言われた分だけ実行しようとするが，それ以上を追求する生徒が少なくなり，深い内容が教えにくい（関西／普通科）

●自宅での学習時間ゼロというような生徒が出てきた（関西／普通科）

【大短進学率40～70％未満】

●知的好奇心の弱さ。「知ること」「わかること」に喜びを感じない（関西／普通科）

●向学心を持って「おもしろい」と感じるのではなく，ただ単にテレビを見ていて「おもしろい」と感じるような授業にしか興味を示そうとしない（中・四国／総合学科）

●学習意欲が下がり努力する前に学校を決めてしまう（関西／普通科）

●課題を必ず提出しなければならないという意欲が低下し，課題提出率も低下した（中・四国／普通科）

●自主的な家庭学習がほとんどできない生徒がいる（東海・北陸／普通科）

【大短進学率40％未満】

●普段の授業に対する取り組みができない（居眠り，私語など）（関東・甲信越／普通科）

●学習意欲に乏しく，安易に欠席や遅刻をする（関東・甲信越／その他）

●あきらめ感が浸透している生徒が多い（東北／総合学科）

■入試の多様化

【大短進学率70％以上】

●複雑な入試システムをすべて把握するのは困難（関東・甲信越／普通科）

●入試の多様化により，求められる学力から進路の決定時期まで様々な点で異なる生徒に対し，教員が指導に必要な知識量も，仕事量も過大なものになってしまう（関東・甲信越／普通科）

●高３教師は４月から進路指導と実務に追われる（関西／普通科）

●学部・学科・入試科目の変更等，毎年目まぐるしく変化するため，高1→2→3と計画的に指導体制が行えない（関東・甲信越／普通科）

●ＡＯ入試などの指導は面接指導などが多く，また，専門的な知識も必要となってくるので，そのための研究などもやらなくてはならない。時間がない（九州／普通科）

【大短進学率40～70％未満】

●毎年あちこちの大学等の入試制度が変わるので，ついていくのが大変（東海・北陸／普通科）

●入試の種類が多すぎるし，時期もバラバラ。現場はパンクしそうです（九州／普通科）

●個別の指導が多くなり，多忙と対応不足が生じる（関西／普通科）

●個々のケースについて多様な入試を組み合わせ，入試計画を立てさせることに非常に手間がかかる（関東・甲信越／普通科）

●安易なＡＯ入試，入学実績のない大学からの指定校依頼等に振り回されて落ちついた指導ができていない（九州／普通科）

●特にＡＯ入試の多様化。あまりにも早い時期に合格すると，その後の高校生活の目標が薄れる傾向にある（東北／普通科）

●大学の学生確保のための“あの手，この手”に生徒がふりまわされている観がある（東海・北陸／普通科）

●さらに多様化，早期化してきており，正しく選択できているのか，不安に思う点がある（中・四国／普通科）

■生徒の進路選択・決定能力の不足

【大短進学率70％以上】

●生徒自身が将来学びたいことや，なりたい職業がなく，なんとなく大学進学しなければならないという理由で志望するので，モチベーションを維持するのが大変（関東・甲信越／普通科）

●能動的に進路を決められず，安易に指定校に走る（東海・北陸／普通科）

●安易にＡＯ，推薦に走りやすい（関東・甲信越／普通科）

●生徒本人が決定できない。教員の意見に頼りがち（関東・甲信越／普通科）

●すべて手取り足取り教えられてきた世代なので何からスタートしていいかわからない（東海・北陸／総合学科）

●生活経験が不足していて適性を見出せない（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率40～70％未満】

●「何をやりたいかがわからない」という生徒が多い。また，「やりたいことが見つからないから決められない」という例も多く，進路選択の内発的動機づけの指導が難しい（関西／普通科）

●社会経験の不足。片寄ったメディアだけの情報などに頼る（関西／普通科）

●ＨＰなどの情報のみで安易に進路を決めてしまい，決めたことで安心してしまう（北海道／普通科）

●自己の適性を認識できずに学部，学科を選び中途退学につながるケースが出てきた（東北／普通科）

【大短進学率40％未満】

●自分の進路選択についていい加減（関西／普通科）

●何とかなるという安易な考え（東海・北陸／普通科）

●何をしていいのかわからない。自分で調べようとしない（九州／専門高校）

●指示されないと動けない，動かない（東北／その他）

進路指導の実施内容

9割が「オープンキャンパス参加指導」

次に自校で実施している進路指導の取り組みをすべてあげてもらった。

生徒対象の取り組みのうち校内で完結できるものから見てみると（図表4－1），「進路ガイダンス」96％，「進学面接指導」94％，「小論文指導」91％などの実施率が高かった。また，進路状況による違いが出ており，「文理選択ガイダンス」「土曜講座」などは大短進学率が高いほど実施し，「就職面接指導」「資格取得・検定奨励」などは進学率が低いほど実施している。

保護者対象の取り組みでは，「三者面談」93％，「保護者向け進路ガイダンス」81％の実施率が高い。

「進路相談・キャリアカウンセリング」の実施率は70%で「進路相談」として聞いた前回85%を大きく下回ったが，前段で見た「仕事量が膨大で生徒に直接指導する時間がとれない」という嘆きと一致すると思われる。

さらに，生徒対象のうち校外実施や外部連携が必要な取り組みでは（次ページ図表4－2），「オープンキャンパスへの参加指導」91％の実施率の高さが際立つ。前回よりも「進路行事としての学校見学会」が増加し，「職業人による講演会」「卒業生の就職先への教員の訪問」は減少した。また，こちらも大短進学率による違いがあり，例えば「就業体験（インターンシップ）」は［大短進学率40％未満］の高校では84％の実施率だが，［70％以上］では23％というように，大きな差があった。

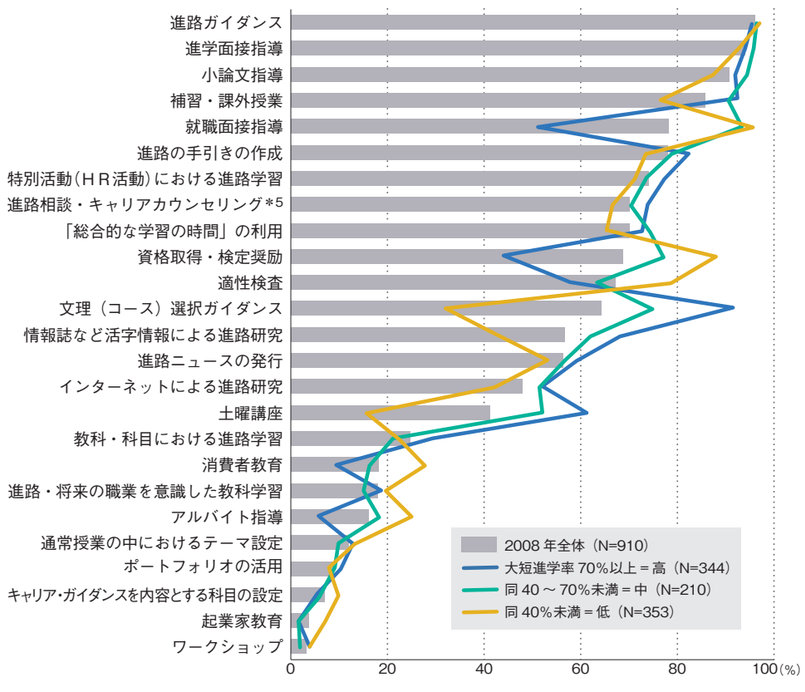
こういった外部との連携を必要とする取り組みも含め，高校進路指導は実に多岐に渡るものとなっていることがわかる。入試・雇用といった進路環境の変化の把握とともに，教師たち自身の学習が何よりも必要になるだろう。

実際，教師対象の取り組み（図表4－2下）で実施率が高いのは「校内研修」で5割を超えている。「教育委員会，教育センターなどでの研修」30％など前回と比べると，比較が可能なものはすべて実施率が上がり，特に「校内研修」の上昇が大きい。そのテーマについては，「進路環境検討会」「情報交換会」などの最新情報の収集や，「キャリア教育研修会」「キャリアカウンセリング」「小論文指導」など指導方法に関する内容などがあげられた。

いまや，進路指導は，ひと昔前の教師の業務をはるかに超えた内容となっている。スピードや専門性など，さまざまな能力が現場教師に求められていると言えそうだ。

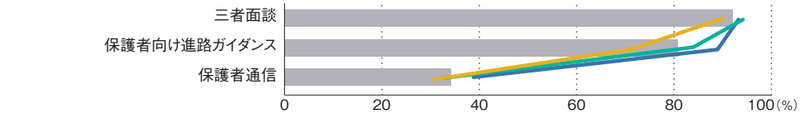
図表4-1　進路指導の取り組み状況【現在実施しているもの】

■生徒対象～校内で完結可能～



全体	高	中	低
96.0（95.9）	95.3	96.2	96.6
94.0（94.7）	94.2	95.7	92.6
90.7（91.0）	91.9	94.3	87.3
85.7（87.9）	92.4	90.5	76.5
78.2（82.9）	51.2	93.3	95.5
78.0（81.2）	82.3	78.6	73.4
74.0（73.6）	77.3	73.3	71.1
70.1（85.4）	73.8	70.5	66.6
70.1（69.9）	72.7	74.3	65.2
68.7（72.1）	43.9	77.1	87.8
67.1（71.7）	57.8	63.3	78.5
64.2（62.0）	91.3	74.8	32.0
56.6（64.0）	68.0	61.9	42.2
56.3（58.9）	59.3	56.7	53.0
47.9（56.7）	52.0	51.4	41.9
41.2（41.0）	61.3	51.9	15.6
24.7（—）	29.4	21.0	22.4
18.1（18.0）	9.6	16.2	27.8
18.0（22.8）	18.6	14.8	19.5
16.0（16.2）	5.8	18.1	24.9
12.0（—）	12.8	9.5	12.7
8.9（7.6）	10.2	9.0	7.6
7.0（11.1）	5.2	5.7	9.6
3.7（2.6）	1.5	1.9	7.1
3.2（—）	3.5	1.9	3.7

■保護者対象

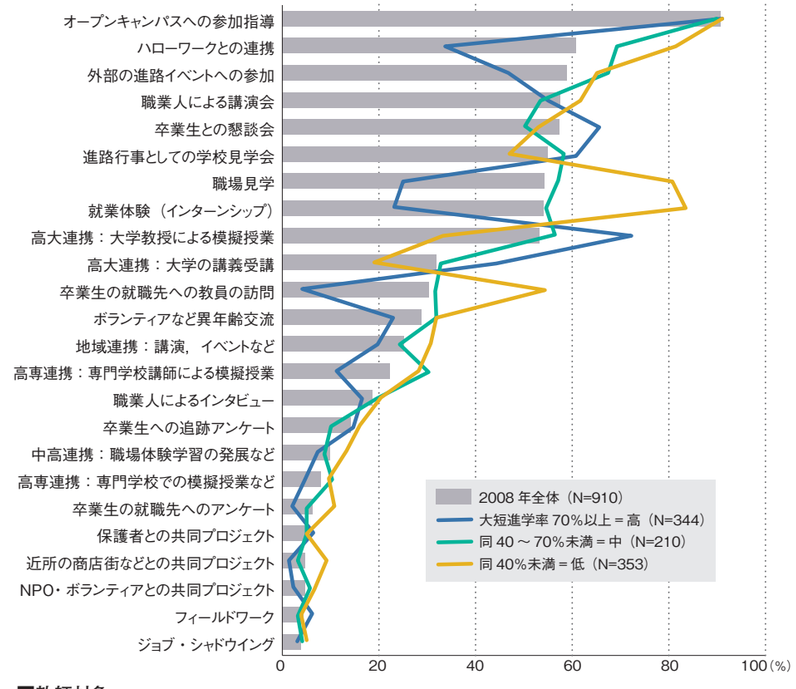


全体	高	中	低
92.1（93.2）	93.3	93.8	90.1
80.8（78.1）	89.0	83.8	71.1
34.2（33.1）	39.0	32.4	30.9

※全体の（　）内は 2006 年調査（N=813）　*5　06 年調査では「進路相談」

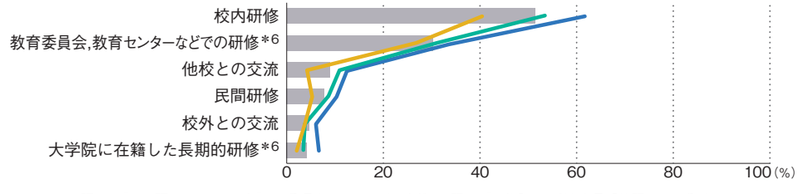
図表4-2　キャリア教育の主な取り組み状況【現在実施しているもの】

■生徒対象～校外で実施，外部・卒業生と連携必要～



全体	高	中	低
90.8（92.5）	91.3	90.0	90.7
60.8（64.5）	34.0	69.5	81.6
58.9（62.9）	47.1	67.6	65.4
57.5（63.3）	55.2	53.8	61.8
57.3（56.6）	65.7	50.5	53.0
54.9（49.6）	61.0	58.6	47.0
54.3（55.7）	25.3	57.1	80.7
54.1（56.2）	23.3	54.8	83.6
53.2（51.4）	72.1	56.2	33.4
31.9（29.9）	44.5	32.9	19.0
30.3（37.9）	4.4	31.9	54.7
28.8（29.6）	23.3	31.9	32.3
25.2（26.7）	19.8	24.3	30.9
22.3（—）	11.3	30.5	28.3
18.6（18.1）	16.6	19.5	20.1
14.2（18.3）	14.8	10.0	16.1
9.9（10.7）	7.3	8.6	13.3
8.0（15.4）	4.9	10.5	9.6
6.3（7.4）	2.3	5.2	10.8
5.4（—）	6.4	4.8	4.8
4.8（—）	1.5	3.3	9.1
4.7（—）	2.3	5.7	6.5
4.4（—）	6.1	3.3	3.4
3.8（—）	3.5	3.8	4.2

■教師対象



全体	高	中	低
51.4（45.8）	61.6	53.3	40.5
30.2（—）	33.4	31.0	26.9
8.9（8.6）	12.5	11.0	4.2
7.8（4.7）	10.2	8.6	5.1
4.6（3.8）	6.1	3.8	3.7
4.2（—）	6.7	3.3	2.3

*6　06 年調査の「校外研修」（25.7%）を「教育委員会，教育センターなどでの研修」「大学院に在籍した長期的研修」に分割

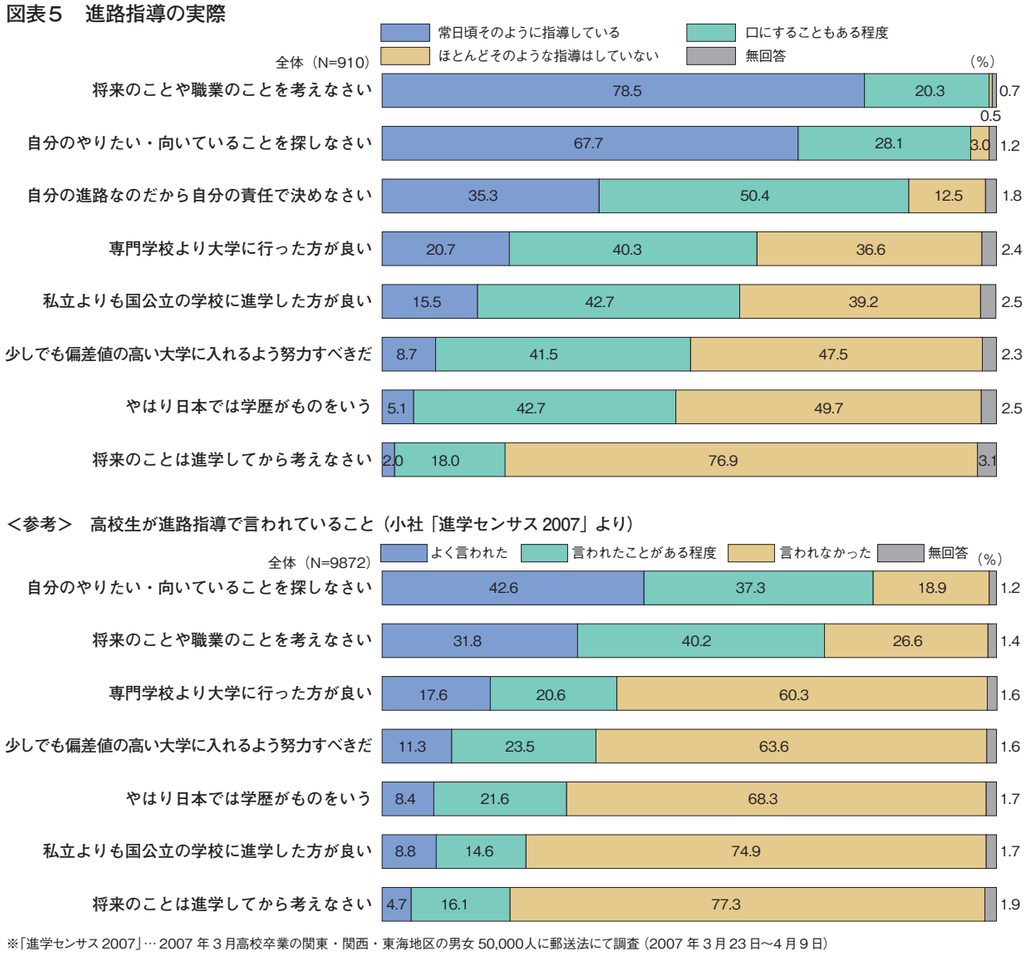
進路指導で教師が伝えていること

「将来や職業のことを考えなさい」が99％

進路指導を行う上で教師が生徒に伝える言葉を8つ示し，それぞれについて「常日頃そのように指導している」「口にすることもある程度ある」「ほとんどそのようなことは指導していない」のいずれかを選んでもらい，「常日頃～」と「口にすることもある～」の合計をグラフにした（図表5）。この「指導・計」が最多なのは「将来のことや職業のことを考えなさい」で99％。「自分のやりたいこと・向いていることを探しなさい」が96％と続き，「少しでも偏差値の高い大学に入れるよう努力すべきだ」50％，「私立よりも国公立の学校に進学した方が良い」58％を大きく上回った。現在不況下での国公立志向やブランド志向の高まりが指摘されており，教師の言葉としてもこれらの項目は今後もっと大きな割合になっていくかもしれない。

同様に高校生に聞いた調査結果を参考としてあげたが，上位2項目は先生の指導とほぼ一致している。「自分のやりたいことを探しなさい」という指導は，「やりたいことが見つからないと決められない」高校生と表裏一体の関係と言えるかもしれない。

図表5　進路指導の実際



※「進学センサス 2007」…2007 年 3 月高校卒業の関東・関西・東海地区の男女 50,000人に郵送法にて調査（2007 年 3 月 23 日～4 月 9 日）

2　高校のキャリア教育の進展度

キャリア教育の推進状況

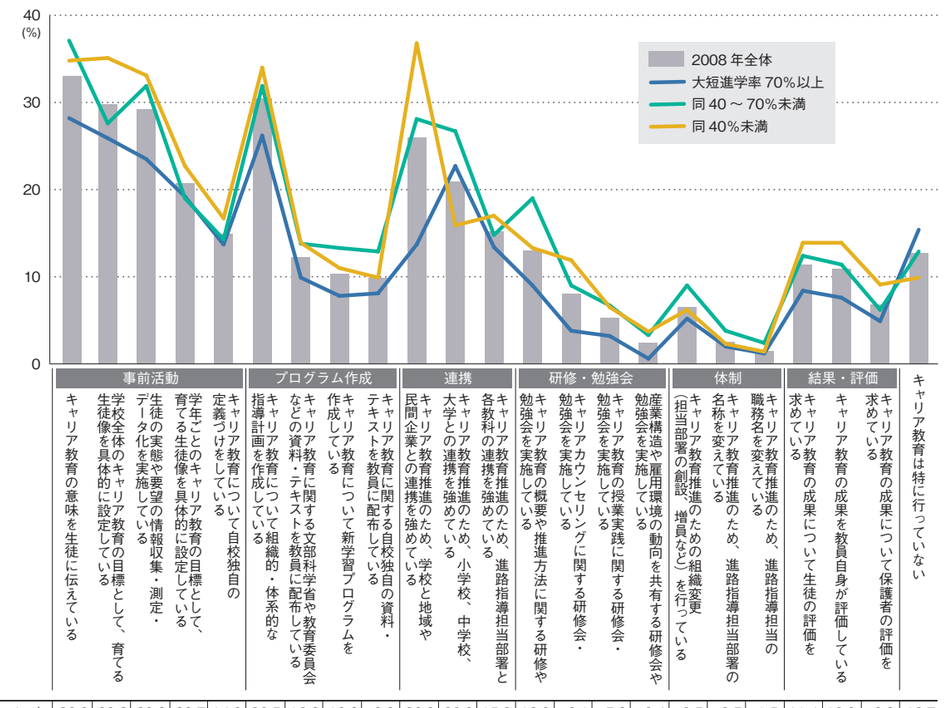
全体の 9 割弱はなんらか実施

「キャリア教育」が文部科学省から提言されて4年余り経った。キャリア教育の定義は「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し，それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」（広義の定義と呼ばれる），端的には「児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てる教育」（狭義の定義と呼ばれる）とされている（キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書　平成16年1月）

それでは現在の高校でのキャリア教育推進状況はどうだろうか。「キャリア教育は特に行っていない」は13％で，9割弱が何らかの活動を行っていると回答している（図表6）。

【事前活動】にあたる項目では「キャリア教育の意味を生徒に伝えている」「学校全体の目標として育てる生徒像を具体的に設定」「生徒の実態や要望の情報収集～」などが3割前後と比較的高かった。また，【プログラム作成】の項目のうち「組織的・体系的な指導計画を作成している」も3割

図表6　キャリア教育の進捗状況（全体／複数回答）



	事前活動					プログラム作成				連携			研修・勉強会				体制			結果・評価			
	キャリア教育の意味を生徒に伝えている	学校全体のキャリア教育の目標として、育てる生徒像を具体的に設定している	生徒の実態や要望の情報収集・測定・データ化を実施している	学年ごとのキャリア教育の目標として、育てる生徒像を具体的に設定している	キャリア教育について自校独自の定義づけをしている	キャリア教育について組織的・体系的な指導計画を作成している	キャリア教育に関する文部科学省や教育委員会などの資料・テキストを教員に配布している	キャリア教育について新学習プログラムを作成している	キャリア教育に関する自校独自の資料・テキストを教員に配布している	キャリア教育推進のため、小学校、中学校、大学との連携を強めている	キャリア教育推進のため、進路指導担当部署と各教科の連携を強めている	キャリア教育推進のため、学校と地域や民間企業との連携を強めている	キャリアカウンセリングに関する研修会・勉強会を実施している	キャリア教育の概要や推進方法に関する研修や勉強会を実施している	キャリア教育の授業実践に関する研修会・勉強会を実施している	産業構造や雇用環境の動向を共有する研修会や勉強会を実施している	キャリア教育推進のための組織変更（担当部署の創設、増員など）を行っている	キャリア教育推進のため、進路指導担当部署の名称を変えている	キャリア教育推進のため、進路指導担当の職務名を変えている	キャリア教育の成果について生徒の評価を求めている	キャリア教育の成果を教員自身が評価している	キャリア教育の成果について保護者の評価を求めている	キャリア教育は特に行っていない
2008 年全体（N=910）	33.0	29.8	29.2	20.7	14.9	30.5	12.3	10.3	9.9	26.0	20.9	15.2	13.0	8.1	5.3	2.4	6.5	2.5	1.5	11.4	10.9	6.8	12.7
2006 年全体（N=813）	31.2	—	—	—	9.2	26.0	19.3	14.3	8.2	21.8	15.7	8.9	13.4	6.3	3.6	2.3	4.2	3.0	1.0	—	—	—	—
【設置者別】																							
国公立（N=675）	33.5	32.9	32.1	22.7	16.3	34.2	13.0	11.0	9.8	32.6	23.4	16.3	14.8	9.8	5.5	3.0	7.0	2.7	1.5	13.6	13.8	9.0	9.9
私　立（N=232）	31.0	21.1	20.7	14.2	11.2	19.8	10.3	8.6	10.3	6.9	13.8	11.6	7.8	3.4	4.7	0.9	5.2	2.2	1.7	5.2	2.6	0.4	20.7
【大短進学率別】																							
70%以上（N=344）	28.2	25.9	23.5	19.2	13.7	26.2	9.9	7.8	8.1	13.7	22.7	13.4	9.0	3.8	3.2	0.6	5.2	2.0	1.2	8.4	7.6	4.9	15.4
40～70%未満（N=210）	37.1	27.6	31.9	19.0	14.3	31.9	13.8	13.3	12.9	28.1	26.7	14.8	19.0	9.0	6.7	3.3	9.0	3.8	2.4	12.4	11.4	6.2	12.9
40%未満（N=353）	34.8	35.1	33.1	22.7	16.7	34.0	13.9	11.0	9.9	36.8	15.9	17.0	13.3	11.9	6.5	3.7	6.2	2.3	1.4	13.9	13.9	9.1	9.9

を超えている。【連携】の各項目は前回からの伸びが目立ち，学校外の地域・企業，小・中学校・大学との連携，校内での連携の両方とも進んでいることがわかった。

しかし全体を見わたしてみると，事前活動，プログラム作成，連携の実施に比べ，研修・勉強会，体制づくり，結果・評価等の実施は低率である。

また国公立と私立の差が大きく，キャリア教育を実施していない率は私立が2割を超え，地域・企業との連携にいたっては，国公立3割に対して私立の実施率は7%にとどまっている。進学率で見ると，進学率が高い高校ほどキャリア教育が低調であることは歴然としている。

全体としては普及してはいるものの，その実施は高校によって まだまだ“まだら”状況と言ってよいのではないか。

しかし，「(学校全体の・学年ごとの) キャリア教育の目標として，育てる生徒像を具体的に設定している」高校が一定数存在することは，今後それに対応した成果の評価実施につながると予想できる。目標設定と結果の可視化――ＰＤＣＡサイクル（計画・実行・評価・改善を繰り返す業務サイクル）を意識することが今後のキャリア教育推進の要だろう。

キャリア教育の体制

進路指導部が担当 総合的な学習の時間に実施

キャリア教育推進のための体制はどの程度整っているのだろうか。

キャリア教育の担当部署の設置状況については，「進路指導部とは別の部署・組織を設けている」はわずか6％（図表7）。最も多かったのは「進路指導担当部署が兼ねている」の61％で，「担当する部署はない」が24％あり，組織面の対応はあまり行われていないようすだ。しかし，総合学科では「進路指導部とは別の部署・組織を設けている」が23％と手厚い学校が少なくなく，「担当する部署はない」は比較的少数だ。

キャリア教育を主にどの時間に実施しているかについては，「総合的な学習の時間」62％と「ＬＨＲ（Long Home Room）」57％に回答が集中し，それ以外は2割以下にとどまった（図表8）。そうした中で総合学科は「総合的な学習の時間」が90％，「LHR」が58％，「教科の時間」も31％と他に比べて高く，さまざまな時間が活用されていることがわかる。

キャリア教育は学校教育活動全体で，特に今後は教科活動の中で実施していくことが推奨されているが，これも実態はまだまだといえるだろう。

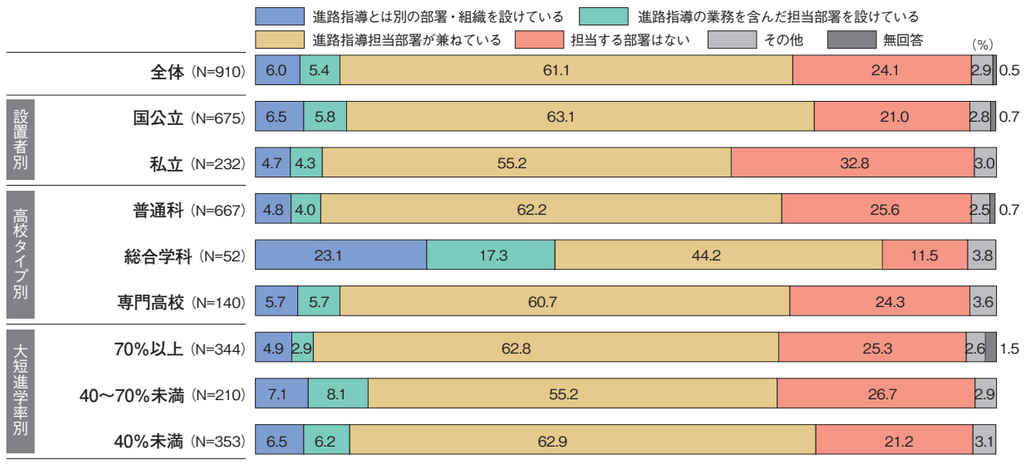
キャリア教育に対する考え

「生徒にとって有意義」が増加

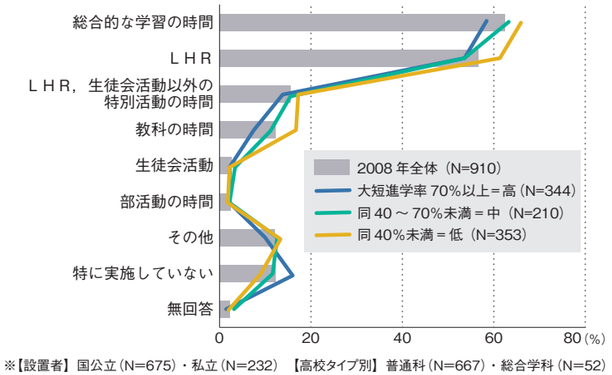
キャリア教育についての考えに近いと思うものを選択肢からすべて選んでもらったところ，最も多かったのは「生徒にとって有意義だと思う」57％で，「学校現場で浸透するかどうかは未知数」40％，「提唱されている内容どおりに現場が取り組むとしたら，教員の負担は相当大きくなりそうだ」39％がそれに続いた（図表9）。

前回と比べると，「キャリア教育の意味がわからない」が減少しており，理解は広がっているようだ。「生徒にとって

図表7　キャリア教育の担当部署



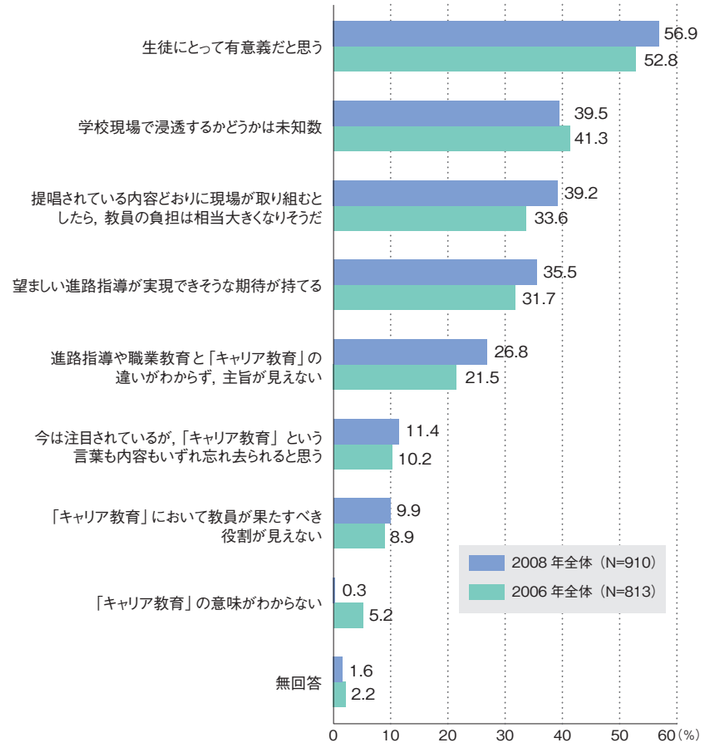
図表8　キャリア教育の主な実施時間



全体	国公立	私立	普通	総合	専門	高	中	低
62.4	70.1	40.5	63.7	90.4	46.4	58.4	63.3	66.0
56.7	57.3	54.7	54.1	57.7	65.7	53.8	53.3	61.5
15.6	15.7	15.5	14.7	19.2	18.6	14.0	15.7	17.3
12.2	13.9	6.9	9.4	30.8	17.9	7.8	11.4	16.7
2.6	3.0	1.7	3.1	1.9	0.7	2.6	3.3	2.3
2.4	3.1	0.4	2.7	1.9	0.7	2.6	2.9	2.0
12.0	11.6	13.4	10.2	26.9	13.6	10.2	12.9	13.3
12.3	9.0	21.6	13.3	5.8	11.4	16.0	11.4	9.1
2.2	2.4	1.7	2.2	1.9	2.1	1.7	3.3	2.0

※【設置者】国公立（N=675）・私立（N=232）　【高校タイプ別】普通科（N=667）・総合学科（N=52）・専門高校（N=140）

図表9　キャリア教育についてどう考えているか



大短進学率 70%以上（N=344）	大短進学率 40～70%未満（N=210）	大短進学率 40%未満（N=353）	キャリア教育実施校
51.2	61.0	60.1	63.0
39.5	42.9	37.7	38.8
37.8	40.5	39.7	41.1
35.2	34.8	36	39.2
24.4	29	28	23.8
10.5	11.0	12.7	11.0
9.6	10.5	9.6	7.7
0.6	0.0	0.3	0.0
2.3	1.9	0.8	0.5

※【キャリア教育実施校】図表6「キャリア教育は特に行っていない」以外の回答校（N=738）

有意義」「望ましい進路指導が実現できそう」という前向きな項目が2つとも伸びている点にも注目したい。

一方で「教員の負担は相当大きくなりそう」「進路指導や職業教育とキャリア教育の違いがわからず，主旨が見えない」も増加しており，実践に伴う困難さや戸惑いがうかがえる。

また，キャリア教育実施校に絞ると，「生徒にとって有意義」「望ましい進路指導が実現できそう」が全体よりも多くなっている。

キャリア教育による変化

実施校の65％で「教員の仕事増大」

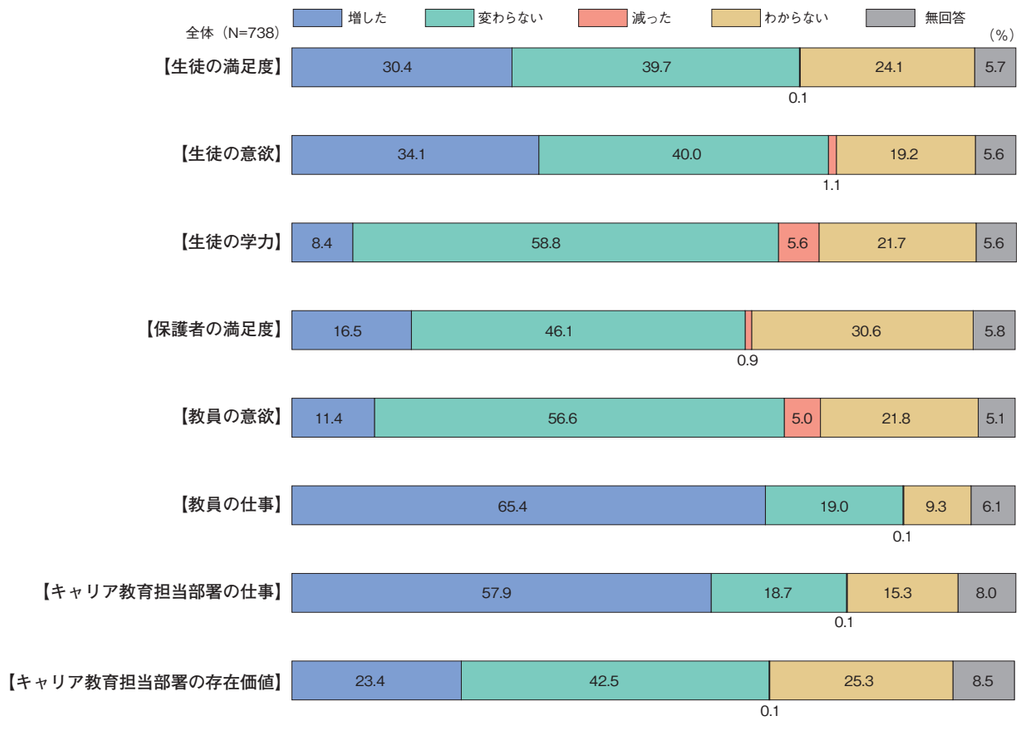
キャリア教育の推進によって何がどう変わったと現場の教師は感じているだろうか。キャリア教育実施校に対して，生徒の満足度や意欲，教員の意欲や仕事量など8つの点についてキャリア教育による増減を聞いた（図表10）。

「生徒の意欲」が増したという回答は34%。「生徒の満足度」が増したという回答も3割を超えた。「保護者の満足度」も「増」が17％あった。

もっとも，生徒と保護者の変化を問うこれらの項目で，一番多い回答は「変わらない」。「わからない」もかなりの割合を占めている。「キャリア教育の成果」は，実施校でも非実施校でも，また学校外からも問われることが多いものの，実はまさに見えにくく，当事者である教師も手ごたえがはっきりあるとはいいがたい状態のようだ。

一方，教員に関する項目では，「教員の仕事」が増したという回答は65%にものぼり，「キャリア教育担当部署の仕事」の「増」も6割に近かった。キャリア教育の導入・推進で，教員の多忙感・負担感はさらに増しているのだ。一方，「教員の意欲」の「増」は11%，「キャリア教育担当者の存在価値」の「増」も23%にとどまった。

図表 10　キャリア教育による生徒・学校の変化



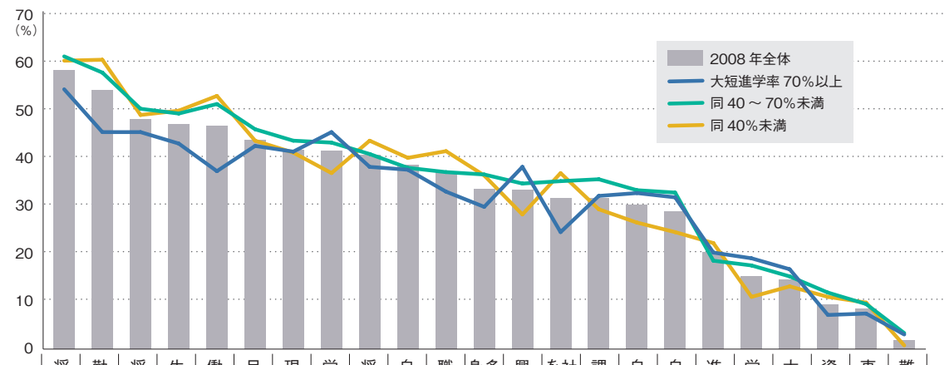
キャリア教育の認識

「将来なりたい姿を描かせる教育」

ところで現場の教師は，キャリア教育とはどのような教育だと考えているのだろうか。13ページに示した文部科学省の広義の定義はわかりにくいと当初より不評だったし，「端的には」以降の狭義の定義は「キャリア教育は就職指導や職業教育のこと」という誤解を生む源となってしまった。また，キャリアガイダンス誌ではキャリア教育の実践事例を数多く取材しているが，自校ならではの定義づけをしている高校も少なくない。そこで本調査では23の様々な考え方を示し，それぞれについて「そう思う」から「そう思わない」までの5段階で回答してもらった（図表11）。

「そう思う」が多かったのは「将来なりたい姿・希望する生き方を描かせる教育」58％，「勤労観・職業観を醸成する教育」54％，「将来の目標を設定させる教育」48％など。一方，「資格取得を促進する教育」「専門的な知識・技術を身につける教育」「難易度の高い学校を目指すための教育」は1割に満たず，より長期的な視点に立つ項目が多めとなっている。大短進学率が高い層では「学ぶ意欲を高める教育」「興味・関心の幅を広げる教育」，低い層では「勤労観・職業観を醸成する教育」「働く意欲を高める教育」の回答率の高さが目立ち，生徒の進路状況によって捉え方は異なる。キャリア教育は実施状況だけでなく「どんな教育か」という認識レベルでも“まだら”なのである。

図表 11　キャリア教育とはどのような教育だと考えているか



	将来なりたい姿・希望する生き方を描かせる教育	勤労観・職業観を醸成する教育	将来の目標を設定させる教育	生きる力を醸成する教育	働く意欲を高める教育	目標に向けて計画立案する力をつける教育	現在の自分の能力や適性を認識する教育	学ぶ意欲を高める教育	将来つきたいと思う職業を見つける教育	自ら意思決定する力を身につける教育	職業や産業の動向について理解するための教育	多様な他者とコミュニケーションする力を身につける教育	興味・関心の幅を広げる教育	社会性（規範意識、思いやり、マナーなど）を身につける教育	課題を発見して解決する力を身につける教育	自分の好きなことや志向性を認識する教育	自己肯定感を向上させる教育	進学先や就職先を選ぶ基準を明確にする教育	学力を向上させるための教育	大学や専門学校について情報収集をさせる教育	資格取得を促進する教育	専門的な知識・技術を身につける教育	難易度の高い学校を目指すための教育
2008 年全体（N=910）	58.0	54.0	47.8	46.9	46.4	43.6	41.5	41.3	40.5	38.4	36.9	33.4	33.2	31.4	31.4	30.0	28.7	20.1	15.2	14.5	9.2	8.4	1.8
【設置者別】																							
国公立（N=675）	59.1	57.3	47.3	49.0	46.8	43.4	40.9	40.0	40.0	39.6	36.7	36.3	30.8	34.1	32.6	27.6	28.0	19.1	15.3	14.1	8.6	8.1	1.2
私立（N=232）	54.7	44.0	48.7	40.5	44.8	43.5	43.1	44.8	42.2	34.5	37.1	25.4	39.7	23.7	28.0	37.1	31.0	23.3	14.7	15.9	11.2	9.1	3.4
【大短進学率別】																							
70%以上（N=344）	54.1	45.1	45.1	42.7	36.9	42.2	41.0	45.1	37.8	37.2	32.6	29.4	37.8	24.1	31.7	32.3	31.4	19.8	18.6	16.3	6.7	7.0	2.6
40～70%未満（N=210）	61.0	57.6	50.0	49.0	51.0	45.7	43.3	42.9	40.5	37.6	36.7	36.2	34.3	34.8	35.2	32.9	32.4	18.1	17.1	14.8	11.4	9.0	2.9
40%未満（N=353）	60.1	60.3	48.7	49.6	52.7	43.3	40.8	36.5	43.3	39.7	41.1	36.0	27.8	36.5	28.9	26.1	24.1	21.8	10.5	12.7	10.5	9.3	0.3

3 大学・専門学校に何を望んでいるのか？

大学への要望

入試の時期・種類の抑制を強く望む声

次に「高大接続・連携の観点から大学・短大および文部科学省に期待すること」を聞いてみた。1位は「ＡＯ入試・推薦入試の実施時期のルール化」で，56％にも上った。ついで「入試の種類の抑制」が4割近い。進路指導の難しさの要因，そして教師の多忙の要因として上がっていた「入試の多様化」に歯止めをかけてほしいとの願いが伝わってくる。

また，「わかりやすい学部・学科名称」35%「実際の講義・研究に高校生が触れる機会の増加」も3割を超えている。大学での学習内容を高校生に理解させるため，「わかりやすさ」プラス「実際に触れる機会」がまだ足りないという現状認識だ。学部学科の名称については，「これ以上複雑にしないでほしい。何が学べて，何が学べないのかの統一基準をつくってほしい」といった声も上がっている。現在議論し検討されているような「ＡＯ入試・推薦入試における学力測定の実施」は18%，「大学入学資格試験の実施」は5％と低率だった。

大短進学率別に見ると，「ＡＯ入試・推薦入試の実施時期のルール化」は40～70%未満の高校で，「入試の種類の抑制」は70%以上の高校で高くなっている。

フリーコメントでも，「ＡＯ・推薦入試の実施の時期を遅らせてほしい。少なくとも10月以降に」と，時期についての要望や，「高校教育の障害となっているＡＯ入試の廃止を」といった強い意見のほか，「大学・短大の入試の多様化で負担が大きいのが現状。一方で，生徒の能力を幅広く測ってもらえるのはありがたいことなので，もう少しルールづくりをしっかりしてほしい」「どんな生徒も受け入れるのではなく，アドミッションポリシーを明確にするなどの基準を示してほしい」と，ＡＯ・推薦入試の意義を認めながらも，一定の基準の明確化を求める声が数多く集まった。

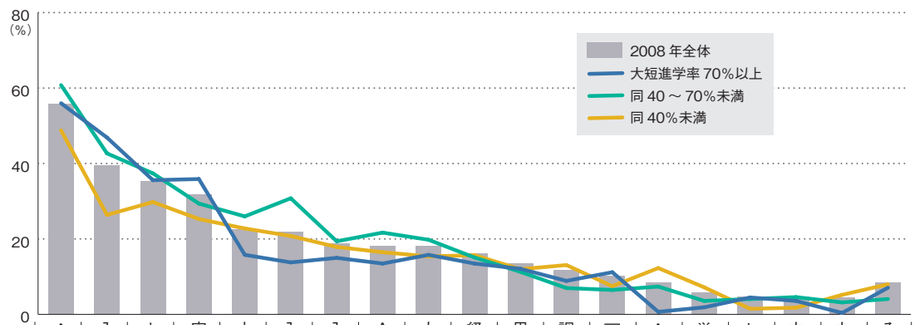
専門学校への要望

「就職実績の公開」が1位

さらに，「高専接続・連携の観点から，専門学校および行政に期待すること」を聞いたところ，「就職実績の公開」が46％でトップ。ついで「卒業時に身につく能力の明確化」37%となった。高校が専門学校に望むことは，出口保障であることがわかる。またこの2項目は大短進学率40%未満の高校でとくに高くなっている。

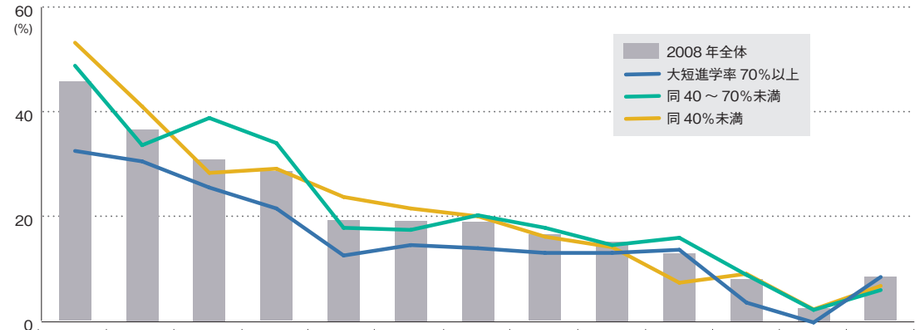
また「中退者（率）情報の公開」31%，「資格取得情報の公開」29%など，専門学校へは情報公開の要望が強い。フリーコメントでも，「専門学校については客観情報が不足している」といった指摘があった。

図表 12　高大接続・連携の観点から期待すること（全体／複数回答）



	ＡＯ入試・推薦入試の実施時期のルール化	入試の種類の抑制	わかりやすい学部・学科名称	実際の講義・研究に高校生が触れる機会の増加	中退者（率）情報の公開	入学前教育の実施	入学者受入れ方針の明確化	ＡＯ入試・推薦入試における学力測定の実施	大学・短大の入試の考え方やデータの情報公開	経営・財務状況の開示	思考力・判断力等を測定する入試の開発	調査書記載内容の明確化	「第三者評価」のわかりやすい表現での公開	ＡＯ入試・推薦入試枠の拡大	学習歴に関する情報を引き継ぐ仕組みづくり	センター試験の複数回化	大学入学資格試験の実施	大学・短大の調査書の積極的活用	その他
2008 年全体（N=910）	55.9	39.6	35.4	31.9	22.5	22.0	18.8	18.1	18.1	16.3	13.5	11.8	10.2	8.4	5.9	4.8	4.7	4.5	8.4
【設置者別】																			
国公立（N=675）	57.3	39.7	34.1	29.3	23.0	21.5	18.5	18.7	17.9	17.0	13.0	11.7	9.6	8.4	5.5	4.4	4.9	4.7	9.2
私立（N=232）	51.7	39.2	39.2	39.2	21.1	23.7	19.4	16.8	19.0	14.2	14.7	11.6	12.1	8.2	7.3	6.0	4.3	3.9	6.0
【大短進学率別】																			
70%以上（N=344）	57.6	48.5	37.2	37.5	17.4	15.4	16.6	15.1	17.4	15.1	13.7	10.5	12.8	2.3	3.5	6.1	5.2	2.0	8.7
40 ～ 70%未満（N=210）	62.4	44.3	39.0	31.0	27.6	32.4	21.0	23.3	21.4	16.7	12.9	8.6	8.1	9.0	5.2	5.7	6.2	4.8	5.7
40%未満（N=353）	50.4	28.0	31.4	26.9	24.4	22.4	19.5	18.1	17.0	17.3	13.6	14.7	9.1	13.9	8.8	3.1	3.4	6.8	9.6

図表 13　高専接続・連携の観点から期待すること（全体／複数回答）



	就職実績の公開	卒業時に身につく能力の明確化	中退者（率）情報の公開	資格取得情報の公開	実際の授業に高校生が触れる機会の増加	業界の最新情報の提供	入学者受入れ方針の明確化	学力測定の実施	入学定員の明確化	「第三者評価」のわかりやすい表現での公開	教員向け説明会の充実	ＡＯ入試の実施	その他
2008 年全体（N=910）	45.7	36.6	30.9	28.6	19.3	19.1	19.0	16.5	15.1	12.9	8.0	2.4	8.4
【設置者別】													
国公立（N=675）	50.4	37.9	33.2	28.7	19.1	20.3	19.6	18.4	16.7	13.6	7.0	2.1	8.6
私立（N=232）	31.5	32.3	24.1	28.0	19.8	15.5	17.2	11.2	9.9	10.8	11.2	3.4	7.8
【大短進学率別】													
70%以上（N=344）	33.7	31.7	26.7	22.7	13.7	15.7	15.1	14.2	14.2	14.8	4.7	0.9	9.6
40 ～ 70%未満（N=210）	50.0	34.8	40.0	35.2	19.0	18.6	21.4	19.0	15.7	17.1	10.0	3.3	7.1
40%未満（N=353）	54.4	42.2	29.5	30.3	24.9	22.7	21.2	17.3	15.3	8.5	10.2	3.4	7.9

大学・専門学校・文部科学省への要望―フリーコメントより抜粋

【大短進学率70％以上】

- ●ＡＯ入試，推薦入試等の早期実施による内定があまりにも安易なものはいかがか。短大では6月中にＡＯ入試の結果が出るところもある（関東・甲信越／総合学科）
- ●ＡＯ入試，推薦入試の実施の時期を遅くしてほしい。少なくとも10月以降（東海・北陸／普通科）
- ●入試スタート時期が早まり，夏休みから行う学校（特に専門学校）がある（九州／総合学科）
- ●高校教育の障害となっているＡＯ入試の廃止。推薦入試の開始時期の規制強化（11月以降実施）（関西／普通科）
- ●大学，短大，専門学校の入試の多様化はかなり負担が大きいのが現状。一方で，生徒の能力を幅広く測ってもらえるのはありがたいことなので，もう少しルールづくりをきちんとしてほしい（関東・甲信越／普通科）
- ●ＡＯ・推薦入試の縮小化，抑制（関東・甲信越／普通科）
- ●学部学科の名称を，これ以上複雑にしないでほしい。または統一の基準をつくってほしい。何が学べて何が学べないのか，何が特徴なのか統一の基準で文科省（または第三者）に評価してほしい（関東・甲信越／普通科）
- ●大学の先生は話がへたな人が多いので，実習的なことで生の研究素材にふれさせたい（関東・甲信越／普通科）
- ●入学試験問題の適正化。卒業生の情報開示。調査書の活用状況（関東・甲信越／総合学科）
- ●目ざす大学のあり方に関連させて入試科目や問題の意図の明確化や，オープンキャンパスの今のあり方に再考を！（中国・四国／普通科）
- ●高校と大学・短大との意見交流の場の設置が必要（関西／普通科）
- ●教える教員としての立場での交流がもっと必要だと思う（関西／普通科）
- ●経営上，定員確保の必要性も充分理解できるが，どんな生徒でも受け入れるのではなく，学力や学習歴を重視したり，アドミッションポリシーを明確にするなどの基準を示してもらいたい（東海・北陸／総合学科）
- ●推薦入試で10月に合格を決めた生徒を3月まで意欲をもって学習させることは困難（東海・北陸／普通科）
- ●入試のパイプとして連携を考えている所もあると思うが，本来の連携ではないので，もっと互いに意見交換をできるとよい（東海・北陸／普通科）
- ●就職の際の正社員と正社員以外の正確な数（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率40～70％未満】

- ●ＡＯ入試のルールが必要。「調査書」の出ない時期に「成績証明書」が用いられたり，どこまでＯＫなのかがわからない。大学生のように高校でも「高2の冬に進路確定」なんてことになるのではと不安（九州／総合学科）
- ●一部大学のＡＯ入試の実施時期が早く（7月），調査書の作成（評定）が難しい場合がある。高校の情報を集めて，ＡＯ入試の実施時期を検討してほしい（東北／普通科）
- ●高校の教育課程（指導要領）の変化に大学入試がついてこれていない（中国・四国／普通科）
- ●入試の多様化で現場はパンク状態です。また，学費がなんとかできず，涙している生徒が毎年います。もっと学費を安くしてほしい（関東／総合学科）
- ●保・幼・小・中・高・専・短・大が一堂に集まる必要がある。そこで新しい動きがでてくると思う（九州／普通科）
- ●ノーアポでの来校は常識を欠いていると思う（関西／総合学科）
- ●各大学，学校によって卒業者の就職データの出し方が違っている。これを統一してほしい（中国・四国／普通科）
- ●専門学校については，客観的な情報が不足している。悪質な学校もあるので，排除するようなシステムが必要と思う。大学については第三者評価である情報がほしい（東北／その他）
- ●指定推薦の乱発は止めてほしい（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率40％未満】

- ●ＡＯ入試に時期的な制限を文部科学省でつくるべき（関東・甲信越／総合学科）
- ●就職率の開示など。その職業に就いていない学生を入れ，開示するのはどうか？オープンキャンパスよりも，平日の普段の学生の姿を見せてほしいところ（北海道／専門学科）
- ●専門学校のＡＯ入試があまりにもわかりにくいので，しっかりとしたルール作りや説明がほしい（東北／普通科）
- ●授業料や入学金を安くしてもらいたい（東海・北陸／総合学科）
- ●上級学校の高校訪問は広報担当者が多いが，授業をしている教員の訪問を強く望む（東北／総合学科）
- ●地域の高・大・短・専と企業も加えて，キャリア教育研究会を作ってはどうか（中国・四国／総合学科）
- ●まともな専門学校には，明らかに存在意義がある。入試が易化しているからと言って，大学へ送ればよいというものではない（中国・四国／普通科）
- ●各学校の卒業時の就職実績の明確化。入学者の定員に対する充足率の公開（中国・四国／専門学科）
- ●経営が危機的な状況にある大学，短大，専門学校がどこなのかがよくわからず，現場での進路指導がしにくい場合がある（中国・四国／専門学科）

総括

高校の指導現場を理解したコミュニケーションを

本調査の結果から聞こえてくるのは多くの業務に追われる進路指導担当教員たちの悲鳴だ。

「大学の入試や学部学科がわかりにくいから，指導するには膨大な情報収集をしなければならない。専門学校の実績情報は自力で探さなければならない。自分たちの高校時代とはまったく様変わりした多岐にわたる進路行事を校内外と連携しながら準備・実行し，本来ならばきちんと検証し次年度につなげていかなければならない。進路選択していく当事者である高校生たちは，勉強もしなければ選べない，決められない。自分で調べない。それなのに3年生の早い段階から以前にはなかった入試方法で上級学校に合格が決まっていく。その手続きは一年中教師が対応している…」。

前ページに紹介した大学・専門学校・文部科学省への要望をつづった自由記述には，自分たちの負担の大半は，学生募集という経営観点から入試形態や学部学科名称をいまのかたちに変えてきた高等教育機関側に責任があるのでは，という批判・不満がうずまいている。こういった高校進路指導現場の状況を理解したうえで，入試改革や，学部学科改変，アドミッションポリシーなどの意図を明確に丁寧に高校に向けて説明していく必要性があるだろう。

入試・学部学科名以外では，現在の経済情勢を反映してか，進学費用軽減の要望，就職状況の正確な情報公開を求める声が目立っている。そこに答えていくことが，高校側からの信頼獲得につながることはむろんだろう。

また，高校からは批判の声だけでなく「大学・専門学校と高校が一堂に集まり，情報交換・意見交換する場がほしい」「保育園・幼稚園・小学校・中学校・高校・大学・専門学校が集まる必要性がある。そこから新しい動きが出てくるのでは」といった，密なコミュニケーションを求める声も散見された。これも進路指導に奮闘する高校教師たちの本心なのだ。

また，調査結果からわかるように高校のキャリア教育は各校レベルで試行錯誤している段階だ。大学や専門学校でも低学年次からのキャリア支援の取り組みが進展しているようだが，悪化する雇用情勢下だからこそ，単なる就職支援を超え，社会が求める力を学生につける教育の必要性と重要性を痛感し，その方法をさらに模索されているところではないだろうか。キャリア教育の取り組みは，高校と高等教育機関では同じ段階にあると思われる。

また，高校生たちの「学習意欲の低下」などの様々な問題は高等教育機関入学後にもそのまま持ち越されているだろう。同じ課題を抱えた若者たちにどんなキャリア教育をするのか。高校，大学，専門学校が，それぞれが行っている内容の情報を交換してはどうかと思う。

次ページより3校の事例紹介があるが，大学レベルの探求活動をさせている高校もあれば，企業と連携して生徒が商品開発をするなど起業家教育を先取りしている高校もある。教科活動も含めた学校教育全体で取り組む高校からは，正規カリキュラムでのキャリア教育のヒントが得られるだろう。

高校と大学・専門学校が，若者を教育する接続した教育機関として，誠実な情報公開と情報交換に取り組み，交流していくことがいま求められているのではないだろうか。

調査概要

■調査目的
全国の全日制高等学校で行われている進路指導の実態を明らかにする。

■調査方法
質問紙による郵送法

■調査対象・対象校数
小社「キャリアガイダンス」を発送している全国の全日制高等学校5085校の進路指導主事（一部単位制を含む）

■調査期間
2008年10月6日（月）～10月22日（水）
・10月29日（水）到着分までを入力対象とした。

■有効回答数
910校（回収率17.9％）

・設置者別
国立675校（74.2％）
私立232校（25.5％）
無回答3校（0.3％）

・高校タイプ別
普通科単独校487校（53.5％）
総合学科単独校（移行中含む）40校（4.4％）
普通科中心で他学科併設校180校（19.8％）
総合学科併設校12校（1.3％）
工業を中心とする高校67校（7.4％）
商業を中心とする高校37校（4.1％）
家政を中心とする高校4校（0.4％）
農業を中心とする高校32校（3.5％）
その他41校（4.5％）無回答10校（1.1％）

・地域区分
北海道82校（9.0％）
東北88校（9.7％）
関東・甲信越257校（28.3％）
東海・北陸154校（17.0％）
関西110校（12.1％）
中・四国112校（12.3％）
九州104校（11.5％）

この記事は参考になりましたか？ご意見をお聞かせください
※ご使用の環境によってはセキュリティ警告が表示される場合がございます
ご意見・ご感想フォームを開く